

二〇一五年度入学者選抜試験問題

国語

(六〇分)

問題は□から■まで(17ページ)ある。

解答は、すべて別紙の解答欄に記入すること。

文字は正しくていねいに書くこと。

句読点も一字に数える。

次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

二〇一三年の四月の一週間、津田大介さんや開沼博さん^{ひろし}とともに、チェルノブイリ^{*}に取材に行ってきました。

ここまでもたびたび触れてきたように、ぼくはいま福島第一原発観光地化計画という大きなプロジェクトを立ち上げています。そのなかで、原発事故の「先輩」にあたるチェルノブイリの現状を知ろうと思い、ウクライナを訪れました。実際に原発周辺の見学ツアーに参加し、「観光写真」を撮影し、政府関係者や旅行会社関係者にもインタビューを取ってきました。成果は『チェルノブイリ・ダークツーリズム・ガイド』という本にまとめています(二〇一三年六月に刊行)。

取材ではさまざまな驚きや発見がありました。なかでもいちばんの驚きは、チェルノブイリ市がいまも多くの人「日常」の場になっているということです。チェルノブイリ市中心部は、じつは原発から一五キロほど離れています。それでも、原発から三〇キロを目安とした地域は、いまでも「ゾーン」と呼ばれる立入禁止区域に設定されており、許可無く立ち入ることはできないし、住むことも許されていません。チェルノブイリ市もいちおうこの「ゾーン」内に含まれています。

しかしだからといってまったくの無人地帯が広がっているのかというと、そんなことはぜんぜんないですね。チェルノブイリ市には、住民こそいないのだけど、役所があり、研究所があり、食堂もあればバスターミナルもある。車も行き来している。なぜか。考えてみれば当然ですが、事故処理にも除染にも労働者は必要だし、彼らの生活を支えるためのインフラも必要だからです。

そもそもチェルノブイリ原発は、発電はさすがにしているのですが、いまでも送電所としては使われ続けていて、原発内にはおよそ三〇〇〇人の労働者が働いている。つまり原発内は労働者がたくさんいるんです。「チェルノブイリ」という記号に踊らされていると、そういう現実が見えなくなりそうです。

短い滞在ではありましたが、ぼくたちはチェルノブイリで、そこでどういうひとが働いているのか、どんな食事を摂っているのか、どんなものを買っているのかを目にすることができました。「チェルノブイリの労働者」と聞いただけだと、防護服で完

全防護された人々が悲壮な表情を浮かべて苦役労働を強いられているすがたが想像されます。これは「フクイチの労働者」*でも同じかもしれない。でも実際には違います。チェルノブイリ原発内はかなり明るい雰囲気なのです。的はずれな想像を避けるためには、実態を見るのが一番早い。福島第一原発事故のイメージに踊らされている日本人々は、チェルノブイリに行くべきだと感じました。

ちなみに、チェルノブイリの立入禁止区域内の空間放射線量は、東京とたいして変わらないくらいに低いものです。数字の解釈はいろいろだと思いますが、とにかくそれは事実です。

今回の取材で²印象的だったのは、放射能や原子力への考えはさまざまであるものの、ウクライナ人たちがひとつ同じ主張をしていたことでした。それは、チェルノブイリ原発事故の記憶は風化しつつあり、風化を食い止めることができるのであれば、きっかけはゲームでも映画でもかまわない、観光客の訪問も賛成だということでした。

チェルノブイリ原発事故は世界史に残る事故です。しかしそれでも二五年も経てば風化する。キエフ市内のチェルノブイリ博物館では、メインキュレーターのアンナ・コロレーヴスカさんがこんな話をしていました。チェルノブイリ博物館は来場者数が落ち込んでいた。そのため、総合的な災害ミュージアムとしてリニューアルする構想まであった。それが福島の事故が起きたことで、再編計画は立ち消えになったと。

いまの日本では、まだ事故の風化は想像されにくいかもしれませんが、風化の危険を訴えても、みな福島を忘れるはずはないと思っている。それどころか、まだ傷も生々しいのだから、そこにはなるべく触れるなという論調すらある。A、福島
島の記憶もいつか風化します。二五年後でも廃炉作業は始まってすらいなないかもしれない。それでも記憶だけは風化してく。チェルノブイリはまさにそのような状況になっていました。福島も、いずれ忘却に対してどう抗うかという問題に直面することになると思います。

だからこそぼくは観光地化計画を提唱しているわけですが、チェルノブイリの事例はいろいろ参考になりました。たとえば

チェルノブイリ博物館では、さまざまな資料や関連情報が、デザイナーの主観のもと、文学的、芸術的に、あたかもアートワークのように展示されている。日本でよく見られるような、客観的で科学的な資料をできるだけ中立的に展示する手法とはまったく違う。日本人の感覚からすると、歴史博物館というよりも、美術展を見せられているような気持ちになります。

ほくはメインデザイナーのアナトーリ・ハイダマカ氏に、この展示方法は適切なのだろうかと尋ねてみました。すると彼は、展示にはむしろ主観的な感情が入っているべきだと答えるのです。ハイダマカ氏は広島平和記念資料館も訪れたらしいのですが、感情抜き客観的な展示だけでは、出来事の記憶は伝わらないと言います。

ここには重要な示唆が含まれています。むしろ、日本とウクライナでは民族性や文化の違いがあるので、単純にチェルノブイリ博物館の方法論を取り入れるわけにはいかないでしょう。けれども、日本で同じような博物館を作ろうとすると、真っ白な壁にグラフやら地図やらを並べ、パネルで説明し、あとはコンピューターでも並べて大量の映像データがエツランできる①ようになって……といった光景が思い浮かびます。しかし本当にそれでいいのか。それでお客さんが来るのか。そう考えたとき、チェルノブイリ博物館のような方法があることは頭のカタスミに留めて置いていい。

どんなに客観的な情報を並べても、だれも見えてくれないのであれば意味がない。情報の提示だけでなく感情の操作も必要だ、というのがチェルノブイリ博物館の思想なわけです。これは本書のテーマと深く関係しています。

これからの社会では、記憶容量の制限が事実上なくなり、とにかくあらゆるものがデジタル化され、無限に近くストックできるようになるはずです。公的機関も今後はオープン化が進み、議事録から内部資料からなにからなにまで、莫大なデータ②が公開されるようになるでしょう。興味さえあれば、だれでもあらゆる情報にアクセスすることができるようになるわけです。

しかし、そうなってくると、こんどはその情報が「本当に見られているのか」が問題になってきます。ネットの情報は、新聞やテレビと違い自然に配達されてくるものではありません。目的の情報に辿り着くためには、まず検索ワードを打ち込まなければならぬ。その情報が見たい、という欲望がなければならぬのです。いくらデータベースを公開しても、公開された情

報をだれも欲望しないのでは意味がありません。あらゆる情報がネット上でストックされるこれからの時代においては、情報の公開の有無ではなく、「検索の欲望」をどうカンキするかこそが重要な問題として浮上してきます。

B

現在、東京電力のウェブサイトにアクセスすると、廃炉作業についてのロードマップをダウンロードすることができます。しかしサイトには大量のPDFが並んでおり、どれが目的のファイルなのかは、かなり熱心に探さないとわからない。むろんそれでも、専門家や運動家はファイルを探しだして内容をセイサする^④はずです。しかしそれは本当の「公開」なのか。普通の市民が関心をもち、アクセスするようになって、はじめて本当の情報公開なのではないか。これからの情報公開は、単に情報にアクセスできるようにするだけではなく、「アクセスしたいと思わせる」ことも必要だということです。

ぼくが福島第一原発観光地化計画で、「観光」という強い言葉を選んでいるのも、まずは関心をもってもらうためです。これももし「原発事故の記憶を残すプロジェクト」だったらどうか。だれも批判しないでしょけれど、逆に関心も呼ばない。だからこそ非難されるのを承知で「観光」という言葉を使っています。

情報への欲望は、身体と深く関係しています。ここで本書のテーマである旅が出てくる。

情報は公開されるだけでなく、欲望されなければならない。ではどうやって欲望させるか。そのためには⁴身体を「拘束」するのがいちばんいいと思います。

身体を拘束、というときよつとするかもしれませんが、単純な話です。たとえばぼくたちはチェルノブイリに行きました。行くのは大変です。日本からウクライナまでの直行便はありません。ようやくキエフについても、チェルノブイリはそこからバスで二時間かかる。でも移動時間は決してムダ^⑤ではありません。なぜなら、その行程のなかでこそ、ひとはいろいろと考えるからです。

⁵この「移動時間」にこそ旅の本質があります。もし今回のチェルノブイリツアーについて、仮想現実で体験可能だったとしたらどうだったでしょう。自宅にいながらにして、チェルノブイリをめぐることができる。いま労働者はこういう生活をしてい

るのか。事故の傷痕きずあとはこう残っているのかとわかる。実際、いまでもチェルノブイリ原発の写真はネットにいくらかでも転がっています。博物館の内部写真もあります。グーグルストリートビューもあります。現地に行っても写真と同じ風景が見えるだけです。仮想現実でも情報は十分に手に入るように思えます。

しかしやはりなにかが違います。違うのは情報ではなく時間です。仮想現実での取材の場合、そこで「よし終わった」とブラウザを閉じれば、すぐに日常に戻ることができる。そうなるとそこで思考が止まってしまう。

けれど、現実ではそんなに簡単にはキエフから日本に戻れない。だから移動時間のあいだにいろいろと考えます。そしてその空いた時間にこそ、チェルノブイリの情報が心に染み、新しい言葉で検索しようという欲望が芽生えてきます。仮想現実で情報を収集し、すぐに日常に戻るのでは、新しい欲望が生まれる時間がありません。

身体を一定時間非日常のなかに「拘束」すること。そして新しい欲望が芽生えるのをゆっくりと待つこと。これこそが旅の目的であり、別に目的地にある「情報」はなんでもいい。

「ツーリズム」(観光)の語源は、宗教における聖地巡礼(ツアー)ですが、そもそも巡礼者は目的地になにがあるのかすべて事前に知っている。にもかかわらず、時間をかけて目的地を回るその道中で、じっくりものを考え、思考を深めることができ。観光Ⅱ巡礼はその時間を確保するためにある。旅先で新しい情報に出会う必要はありません。出会うべきは新しい欲望なのです。

いまや情報そのものは稀少*きせうしゆざい財ではない。世界中たいていの場所について、写真や記録映像でほとんどわかってしまう。にもかかわらず、旅をするのは、その「わかってしまった情報」に対して、あらためて感情でタグ付けをするためです。いまや海外旅行なんて必要ない、グーグルストリートビューで写真を見れば十分じゃないかというひとは、このことを見落としています。情報はいくらかでも複製できるけど、時間は複製できない。欲望も複製できない。情報が無限にストック可能で、世界中どこからでもアクセスできるようになったいま、複製不可能なものは旅しかないのです。

(東浩紀『弱いつながり 検索ワードを探す旅』による、一部字体を変更した箇所がある)

【注】 *津田大介 〓ジャーナリスト。 *開沼博 〓社会学者。

*チエルノブイリ 〓ウクライナ北部の都市。一九八六年に原子力発電所が爆発事故を起こした。

*インフラ 〓学校・病院・道路・上下水道・電気・ガスなどの公共施設。 *フクイチ 〓福島第一原子力発電所。

*メインキュレーター 〓「キュレーター」は、博物館・美術館などの企画・構成・運営などを司る専門職。

*稀少財 〓珍しく価値のあるもの。

問一 〓線部①～⑤のカタカナを漢字に改めよ。

問二 空欄 A・B に入る語として最も適

切なものを次の中から選び、それぞれ記号で答えよ。

ア そこで イ けれども

ウ すなわち エ たとえば

問三 〓線部1「『チェルノブイリ』という記号に踊らさ

れていると、そういう現実が見えなくなり「ます」とあ

るが、どのような意味か。最も適切なものを次の中か

ら選び、記号で答えよ。

ア 原発事故により汚染された地域の持つ意味の大き

さは、実際にその場を訪れることで初めて現実のも

のとして実感できるものになるということ。

イ 立入禁止区域の様子には全く変化がなく、そこで

働く人々は依然として悲惨な状況下での労働を強い

られていることを忘れてはならないということ。

ウ 悲惨な事故の現場としての側面しか見ていないと

実際のその場の日常が見えなくなり、現状とイメー

ジとの間に食い違いが生じてしまうということ。

エ 原発事故の「先輩」の現状は日本の私たちにとって

近い未来を示唆するものであり、そこから目を背け

ると重要なものを見失うことになるということ。

問四 〓線部2「印象的だった」とあるが、様々な考えを

持つウクライナ人たちが同じ主張をしていたのはなぜ

か。理由を説明せよ。

問五 — 線部3「チェルノブイリ博物館の方法論」とあるが、チェルノブイリ博物館の展示の方法論とはどのようなものか。解答欄に合うかたちで答えよ。

問六 — 線部4「身体を『拘束』する」とは具体的には何をすることか。簡潔に答えよ。

問七 — 線部5「この『移動時間』にこそ旅の本質があります」とあるが、

I ここで言う「旅の本質」とはどのようなものか。説明せよ。

II それに対して、「仮想現実」の問題点とはどのようなものか。説明せよ。

次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

中学二年生の井上音和は、両親の離婚と父の事業の失敗により、転校しなければならなくなった。彼の父は、フォトスタジオで働くことになった。初めて登校する朝、音和に声をかけてきたのが、三年生で新聞部部長の吉岡祐仁であった。ある日、吉岡は、週末に撤去されてしまう踏切の侵入防止用のコンクリート柱は、ある人の墓標であったという話をした。

十一月のある日、生徒たちは総出で校内や学校のまわりのそうじをした。学校の坂道にふりつもった落ち葉を袋に掻きあつめて、業者にひきとってもらうのだ。以前は敷地のすみで堆肥をつくり、落ち葉たきをすればよかったが、今や近隣の住宅や環境への配慮から、落ち葉も廃棄するものとなっている。

枯葉や折れた小枝といっしょに、コナラやクヌギが子孫をふやすもくろみで雨とふらせたドングリも回収されてしまうのだが、それでも地面に取りのこされるものがある。なぜなら、それらはドングリのかたちはしているけれども、もう「I」根をのばして、地面に固定されているからだだった。

校内そうじをすませた生徒たちは、割りあての場所で担任のもとへ集まり、点呼をとって解散となった。短い晩秋の日が暮れてゆく。鳩舎をのぞいたあとで玄関へむかっていた音和は、学習室のならびにある音楽室から聞こえてくる電子オルガンの音に **A** をすませた。とくべつ巧いわけではなかったが、音和にとっては母の十八番として認識している軽音楽であったので、耳なじみがあった。だれが弾いているのかを知ろうとして、テラスづたいに音楽室にちかづいた。弾いているのは藤倉しのぶだった。

窓ごしにのぞいている音和にたいして、はいってくれば、という表情でうながした。当番日誌と音楽室の鍵が教卓のうえにおいてあり、彼女のクラスの割りあてがこの教室とテラスであったことがわかる。吉岡もおなじクラスだ。

「これってね、うちの母がよく弾く曲なんだ。子どものころ、電子オルガンで習って、これをおぼえた直後にやめたんだっ

て。だからこれがいちばんまともな曲で、これしか弾けないの。わたしもこれだけ。」

弾きながら、藤倉はそんなことを云う。フランス語で「オ・シャンゼリゼ」というバックコーラスのはいる、浮かれた曲だ。そのわりに、藤倉はまじめくさった顔で弾いている。

「吉岡をさがしてきたんでしょ？」

「そういうわけでもないですけど、」

「きょうは、お墓参りで学校を休んでるんだ。」

「お彼岸でもないのに？」

藤倉はピアノを弾きながらうなずいた。やがて、「オ・シャンゼリゼ」のコーラスの部分だけ口ずさんだ。「おお、シャンゼリゼ」と唄っている。雑学の知識のある音和はそれがまちがいだと知っていたため、指摘しようと

B

をはさみかけた。

だが、藤倉のほうで唄うのもピアノを弾くのもやめてしゃべりはじめた。

「このあいだ吉岡をさそつてとなりのF市のプラネタリウムへ行ってきたんだ。【Ⅱ】暗くなって星の数がふえてくると、きれいというより、たくさんありすぎて、どこを見ているのかわからなかった。おまけに自分のからだも見えないの。ひとつも見えないんだよ。そうするとね、自分のからだの範囲というのか、大きさまでわからなくなる。自分のからだの向きもわからないの。どこにいるのか確認したくなって、いすの背もたれから起きあがったんだ。そうしたら、なおさらどこを向いているのか見当もつかない。もう一度いすにもたれかかろうとして、吉岡にぶつかった。」

「つまり、のろけてるんですか？」

「……あの吉岡が泣いてるんだよ。空いっぱい星を見ていたら、泣けてきたんだって。もし、あの晩に兄が見あげた空にもこんなにごちゃごちゃした星が見えていたら、死のうなんて思わなかっただろうって。雑然とした風景は、人**に**ばかばかしさを感じさせてくれるはずだからって。」

「お兄さん？」

「四年とすこし前に亡くなったんだ。井上に墓標を見せたことがあるって云ってたよ。だから、わかるでしょ？ きょうはほんとうならお兄さんの二十歳の誕生日だったんだ。だから、家族で、お墓参りをしてる。」

藤倉はまた「オ・シャンゼリゼ」を弾いている。故人の話をするのに、その浮かれた曲がどう関係あるのか、音和にはわからない。藤倉のことなので、べつに深い意味はなく思いつきで弾いているだけかもしれない。亡くなった人を回想するのに、

【Ⅲ】した曲でなくてはいけないという法もない。

音和は立ち去りかけて、足をとめた。

「……ずっと云いそびれてたんですけど、しのぶ先輩の自転車がパンクしたとき、駅前にはいたチラシ配りの男っていうのは、ぼくの父なんです。ケガの手当をありがとうございました。」

「知ってる。このあいだ、吉岡とフォトスタジオにいったときに、わかったんだ。」

「記念写真でも撮りにいったんですか？」

「ちがうよ。相談しにいったの。吉岡のお兄さんの十五歳のときの写真があるんだけど、その写真をもとに二十歳の顔を合成できるものかどうか。^{*}モニタージュ写真みたいなかんじで。自転車がパンクしたときに、名刺をもらったんだ。そのときは井上のおとうさんだとは思わなかった。それほど、めずらしい名字じゃないでしょ。肩書に映像技術者と書いてあったから、きっとCGに詳しいにちがいないって、吉岡が。整形手術の術後のイメージ画像のようなのを想像していたんだと思うんだ。」

「父は合成できると云いましたか？」

「可能だけど、そんな画像はつくりたくないほうがいいと云われたの。そう考えるからには、もうとつくにきみのなかにイメージがあるはずで、それと比べてみたいだけなんじゃないかって。……²吉岡はうなずいてた。」

線路のコンクリート柱もとりのぞかれ、今はもう吉岡の意識のなかにだけある墓標となっている。

音和は音楽室にあったピアノを弾いた。藤倉が好き勝手にリクエストするのにあわせ、名曲でもドラマの主題歌でも、おぼえているかぎりなんでも弾いた。久しぶりに指を動かしてみたくなったのだ。

学校を出るときには、もう切り通しの道には暗いかげができていた。そうじを終えた生徒のほとんどは帰宅して、校舎は静まっている。線路を走る電車の音がひびいた。まもなく、上り線の架橋も完成する。

翌朝、いつもどおり父の出勤にあわせて早めに家をでた音和は、途中で吉岡に待ちぶせされた。

「おはようございます。」

「おはよう。ちょっといいかな。」

ふたりは川べりの道を歩いた。空は晴れわたって、対岸の家の屋根ごしに、崖地の緑が見え、なかでも校庭に植えられたポプラのこずえはひときわ高く伸びあがっている。青空につきささるようになってあたりが、黄色く染まりはじめた。

「……兄は高校に入学した三日目に電車で轢かれたんだ。おれは小学校の五年になったばかりで、いったいなにが起こったのか理解できなかった。」

吉岡は、いきなりそんな話をはじめた。おどろいて、Cをみはる音和に、黙って聞いてくれ、というように目配せをした。

「あの日から、兄がいなくなった。それまでは、目の前にいる人を追いかけていけば、なにをするにも迷わずにすんだ。おれはバカな弟で、レストランへはいつでも遊園地のアトラクションでも、あれこれ目移りして自分ではさっぱり選べなかった。考えるのもめんどうだった。だから、いつでも兄とおなじものにした。服でもなんでもそうだった。五つも歳が離れていたから、兄の選ぶものはなんでもセンスがいいと思つたし、正しいと信じていた。兄のまねをしていけばまちがいはない。なんて楽な人生だと思つた。それがとつぜん、森のなかへ置きざりにされたんだ。はじめて、兄のことを恨んだよ。悲しむよりなにより、どうしてなんだ、と抗議した。今もおなじ気持ちだ。」

「お兄さんは、なにを悩んでいたんですか？」

「たぶん、受験に失敗したことだろうと思う。遺書はあの、サヨウナラ、だけだから、推測するしかないんだ。不本意な高校

に入学したことを、兄は気に病んでいた。通学とちゅうで、自分が進学するつもりだった学校の生徒にあうのが耐えられなかったんだろう。無理な受験だったわけじゃない。試験のあとの自己採点でも合格は確実だった。本人もそう思っていた。でも、結果は不合格だった。どこかで設問にたいする回答の欄がひとつずつズレていたのさ。どれかを後まわしにするつもりで空欄しておいたのを忘れたんだ。その失敗から、兄は立ち直れなかった。卒業式も休んだ。おれには理解できない。学校をそこまであてにしていけないから。だいいち、兄が入学した高校だって簡単なところじゃない。おれはそこを第一志望しているんだ。」

「ほんとうに？」⁴

「……なんだよ。」

「なんとなく、先輩は心のどこかで、お兄さんを越えてはいけなと思っています。理解できないと云いながら、死を選んだお兄さんを否定もしない。赤の他人のぼくなら、悲しみの以前に、器の小さい人だったんだなという思いのほうが先にくる。先輩が墓標の話をきかせてくれたときに云っていたとおり、お兄さんは、いずれ撤去されてしまうような柱しか選べない人だったんです。でも先輩は自分で、もっと頑丈でしぶといのを選ぶと云った。……そういう人が、お兄さんに遠慮して志をまげることはない。」

そのことばにたいして、吉岡はふだんのように笑いとばさず、かすかな笑みにまぎらせて小さくためいきをついた。

ふたりは遊歩道の一面につくられた小さな休息所のベンチにこしかけた。朝のひだまりができています。そこは、川べりにもともとあった桜の古木をそのままのこし、憩いの場につくりかえてある。

こずえにいる小鳥の影が、遊歩道の石だたみに映る枝さきでちらちらと動く。

「兄がいなくなるまえは、追いこそうなどと考えもしなかったし、その可能性を検討してもみなかった。兄の意見はいつも正しい。兄はまちがわれない。兄は勝つ。ささいなことも、重要なことも、兄にしたがっていれば、なにもかもがうまくゆく。そう信じていた。どこへでかけても、兄の背なかごしに景色けしきを見ていた。おれが自分の意志で前へでることなんて、なかったん

だ。……兄がいなくなり、はじめて自分で考えたときに気づいた。おれはべつにリレーの選手になりたいわけじゃない。野球もサッカーもバスケットも好きだけど、部活でレギュラーにならなくてもいい。生徒の代表で朝礼台に立つ気もない。進学塾へも通いたくない。それはぜんぶ兄が望み、兄が実現していたことで、おれの願望じゃなかった。たんに兄のまねをしていただけだ。兄が死んだ年齢に近づくとつれて、その思いが強まった。……井上の云うとおり、ほんとうは兄がはいりたかったあの学校を受けるつもりだった。合格すれば、兄を追うのではなく、晴れて兄とはべつの人生を歩んでゆけると思った。はっとしたよ。そこには、敵意もひそんでいたから。いつも自分の前にいた兄をじゃまに思う気持ちだが、どこかにあったんだ。そういう愚かさを自覚できなかったなんて、⁵ どうしようもないバカだな。」

「そんな反省は先輩には似合いませんよ。幕前で合格の報告をして、恨まれて本望だ、ぐらいに云ってくれればいいんです。」

「気楽に云うな。まだ受験してもいないんだ。」

「リラックスして愉快に過ごせ、と云ったのは先輩です。」

「その耳は、なんでできてるんだよ。録音装置つきか？」

「合格しますよ。」

吉岡は笑い、いこうか、とうながした。住宅地のなかの、舗装していない路地をぬけて、学校の坂へと向かった。前を歩く吉岡の背なかに、木もれびが映っている。音和にとって、その背なかは壁とは感じられない。一方的に自分だけが恩恵を受けている、^{*}濾過器^{ろかき}のようなものだった。音和にはまだ、感謝のことばのほかには返すものがない。それすら、面とむかつては口にしたことがないのだ。

「……井上、」

急にふりかえって、吉岡がきまじめな顔をした。

「なんですか？」

「ちよつとまえに、泥のなかにババ^{*}がまぎれてたぞ。ちゃんと避けたか？」

音和は、あらためて足もとを意識した。云われてみれば、どこもなく重い。まだ、厚底のスニーカーをはきつづけていた。吉岡は、まじめぶるのをやめて笑いだした。

「こういう道では、足もとを見て歩くのが常識なんだよ。おぼえておけ。」

学校の坂道には、朝露をまとった草の葉が茂っていた。音和は滴をすくいにとって、前を歩く吉岡を追いこしざま首すじへ放りこんだ。すかさず、仕返しをされる。身長にまさる吉岡のほうが、楽々と音和の首すじに手がとどくのだ。背なかにはいりこんだ滴がいつまでも冷たい。音和にとって試験だった二学期が終わろうとしていた。

(長野まゆみ『野川』による)

【注】 *十八番 || 得意の芸。 *モニタージュ写真 || いろいろな要素を組み合わせて作った写真。

*濾過器 || 液体中の固体の粒を取り除く装置。

*ババ || 糞かん。

問一 空欄【I】～【III】に入る語として最も適切なものを

を次の中から選び、それぞれ記号で答えよ。

- ア しつかり イ しんみり
ウ だんだん エ ほんやり

問二 空欄 A C に入る語として最も適

切なものを次の中から選び、それぞれ記号で答えよ。

- ア 足 イ 口 ウ 耳 エ 目

問三 ——線部1「雑然とした風景は、人にはかばかしさ

を感じさせてくれるはず」とあるが、それはなぜか。

その理由として最も適切なものを次の中から選び、記号で答えよ。

ア たくさんのものが交じり合う重厚な景色が単純な自分
を自覚させ、深く考えることの難しさを認めるから。

イ 次々にものが生まれ続ける新鮮な景色が頑固な自分を
目覚めさせ、変わらないことの古さを実感する

から。

ウ 秩序なくものが並ぶ騒々しい景色が注目されたい
自分を思い出させ、ルールに従うことの難しさを学
ぶから。

エ 無数にものが散らばる広大な景色がちっぽけな自
分を気づかせ、小さなことにこだわることの無意味
さを知るから。

問四

——線部2「吉岡はうなずいてた」とあるが、音和の
父の言葉をきっかけに、吉岡は何に気づいたのか。最
も適切なものを次の中から選び、記号で答えよ。

ア 墓標はなくなってしまったが、二十歳の兄の写真
さえ手に入れることができれば、残された家族の仲
が深まると考えていたこと。

イ 墓標はなくなってしまったが、自分のイメージに
合った二十歳の兄の写真を手に入れることで、兄を
目標にする気持ちを思い出せること。

ウ 墓標がなくなってしまったので、兄が生きていた
証を示すために、二十歳の兄の写真を用意しようと
思ったが、写真はあっても兄は戻らないこと。

エ 墓標がなくなってしまったので、形あるものとし

て二十歳の兄の写真を残しておこうと思ったが、写
真がなくても兄を思う気持ちはなくならないこと。

問五

——線部3「はじめて、兄のことを恨んだよ」とある
が、なぜ兄を「恨んだ」のか。兄が吉岡にとってどのよ
うな存在だったかを明らかにした上で、説明せよ。

問六

——線部4「ほんとうに？」とあるが、この言葉に込
められた、吉岡に対する音和の心情を説明せよ。

問七

——線部5「どうしようもないバカだな」と思うよう
になった吉岡の心情の変化を説明せよ。

次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

海中に蚪まきうと云いふ物あり。蛇に似て、角なき物と云へり。妻つまの孕はらみて、猿さるの生いけ肝きんを願ねがひければ、得難とくがたき物なれども、志しの色いろも見えむとて、山の中へ行きて、海辺の山に猿多さるおほき処ところへ尋ね行きて、云はく、「海中うみに菓多くだき山あり。あはれ、おはしませかし。我が背に乗せて、具ぐしてこそ行かめ」と云ふ。「さらば具して行け」とて、背せに乗りぬ。

海中遙はるかに行けども、山も見えず。「いかに、山は何なんくぞ」といへば、「げには海中うみにいかでか山あるべき。我が妻、猿の生け肝を願へば、そのためぞ」と云ふ。猿、色を失ひて、せむ方なくていふやう、「さらば、山にて仰せられたらば、安き事やすきことなりけるを、我が生け肝は、ありつる山の上うへに置きたりつるを、俄にかに来つるほどに忘れたり」と云ふ。「さては、肝きんの料りょうにてこそ具して来つれ」と思ひて、「さらば返りて、取りて給たまべ」と云ふ。「左ひだり右みぎなし。安やすき事」と云ひけり。さて、返りて山へ行きぬ。猿の木に登りて、「海の中に山無し。身を離れて 無し」とて、山深やまふかく隠かくれぬ。蚪まきう、ぬけぬけとして帰りぬ。

(『沙石集』による)

【注】

* 蚪まきう 角のない竜。

* 孕はらみて 妊娠して。

* 生いけ肝きん 生きている猿の肝臓。

* 菓くだ 木の實。

* おはしませかし 出でになれがいいのに。

* 具ぐして 連れて。

* ありつる 見つきの。

* 肝きんの料りょうにてこそ具して来つれ 肝を取るために連れて来たのに意味がない。

* 給たまべ ください。

* 左右なし どちらろん。

問一 — 線部1「志の色も見えむ」とあるが、これは「虬」のどのような気持ちを表したのか。最も適切なものを次の中から選び、記号で答えよ。

- ア 猿に感謝を伝えたい。
- イ 猿の様子を知りたい。
- ウ 妻に誠意を示したい。
- エ 妻の本心を確かめたい。

問二 — 線部X、Y、Zの主語について、「虬」ならばA、「猿」ならばBと答えよ。

問三 — 線部2「安き事」とあるが、どのようにすることが「安き事」なのか。簡潔に説明せよ。

問四 空欄 に入る漢字一字の語を文中からさがして答えよ。

問五 — 線部3「ぬけぬけとして」とあるが、これは虬のどのような様子を表したのか。最も適切なものを次の中から選び、記号で答えよ。

- ア まぬけな様子で
- イ 満足げな様子で
- ウ 楽しそうな様子で
- エ 怒りに満ちた様子で